

2014 年 9 月 8 日

甘味資源部会長 中嶋康博殿

食のコミュニケーション円卓会議 市川まりこ

「甘味資源作物の栽培コストを低減する」という共通目標に向け、遺伝子組換え甜菜など、海外で広く利用されている技術の導入によるメリットを試算する等、具体的な検討を要望します。

これまでの甘味資源部会の議論から、甘味資源作物全般において作物栽培コストを低減させる必要性については、委員の皆様全員が共有していると認識しています

北海道で栽培されている甜菜については、国産砂糖生産の 8 割を担う重要な甘味資源であり、北海道の畑作における基幹作物です。しかし、甜菜の作付面積は平成 16 年以降一貫して減少しています(1)。作付面積の減少要因に関して甜菜生産者に対して行われたアンケートでは、甜菜栽培の問題点として、「コストがかかる」「手間がかかる」が上位に挙げられています(2)。

私は、昨年、北海道で甜菜を栽培する生産者に直接話を聞く機会がありました。雑草防除コストの高さ、除草に要する労働時間の多さ、除草作業のきつさが、甜菜を栽培するにあたっての大きなネックになっているとお話されました(3)。また、労働時間を削減するために現在普及が望まれている直播技術、不耕起技術については、雑草防除の問題から拡大が難しいとの事でした。

一方、海外の甜菜産地の状況を見ると、米国やカナダでは、ヨーロッパの種苗メーカーが実用化した除草剤耐性の遺伝子組換え甜菜が利用される様になり、いずれにおいても、9 割以上の甜菜が遺伝子組換え品種となっています(4)。この遺伝子組換え品種の導入により、除草作業が容易になり生産コストや作業時間が大きく低減されたと報告されています(5)。

日本においては、遺伝子組換え農作物や遺伝子組え食品に対する懸念が根強く残っているとして、遺伝子組換え農作物の国内栽培は、サントリーの青いバラを除いて行われていません。このような状況の中、北海道で除草剤耐性の遺伝子組換え甜菜を利用するに当たっては、条例の問題など様々な課題がありますが、既に海外で広く利用され、国内での安全性評価も終了している技術について、国内で活用されていないだけでなく、検討すらされていない状況は、非常に残念です。

今後、北海道の甜菜栽培を維持し、甘味資源作物の供給体制を維持するためには、生産コストや労働力の低減が不可欠です。遺伝子組換え甜菜を国内に導入した際の生産者メリット、精糖業界へのメリットなどを試算し、甘味資源部会を含む食料・農業・農業審議会においても、このような海外で現実に関果を上げている技術の日本への導入を検討していただくことを要望致します。

以上

参考

(1)平成25年産てんさいの作付面積及び収穫量(北海道)ー てんさいの収穫量は、前年産に比べて9%減少ー

http://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/sakumotu/sakkyou_kome/pdf/syukaku_tensai_13.pdf

(2)北海道農政部農産振興課:てん菜栽培をめぐる情勢について

<http://www.gtbh.jp/news/beet/25/tennsai-1.pdf>

(3)Food Watch Japan「北海道のビード(てんさい)生産現場の現状と特定除草剤耐性テンサイへの期待」

<http://www.foodwatch.jp/science/readwritebio2/47095>

(4)国際アグリバイオ事業団(ISAAA)

(5)ネブラスカ州立大学:Economics of Sugarbeet Production

<http://www.ianrpubs.unl.edu/epublic/live/ec156/build/ec156-14.pdf>